

レトロビル&史跡

*Nostalgic Building
&
Historical Sites*

C シップ神戸海岸ビル
(旧三井物産神戸支店)
Ship Kobe Kaigan Bldg.



■大正7年(1918)
【改築】平成10年(1998)
■鉄筋鉄骨コンクリート造15階建
■設計: 河合浩蔵【改築】竹中工務店
旧海岸ビルは鉄筋コンクリート造4階建で、当時ウイーンの新建築運動であったゼツェッショングの影響を強く受けている。阪神・淡路大震災後に改築。

D あいおいニッセイ同和損保神戸ビル
(旧神戸海上火災保険ビル)
Aioi Nissay Dowa Insurance Kobe Bldg.



■昭和10年(1935)
■鉄筋コンクリート造4階建
■設計: 長谷部竹腰建築事務所
当初から保険会社ビルとして建てられたアメリカンスタイルのビル。1階から3階に届く縦長のアーチ窓はロマネスク調で仕上げられ、美しいプロポーションをもっている。

A 旧居留地38番館
(旧ナショナルシティバンク神戸支店)
The Former National City Bank Bldg.



■昭和4年(1929)
■鉄骨鉄筋コンクリート造3階建
■設計: ヴォーリズ建築事務所
設計はウォーリズ事務所のW.E.ハインズ。南側の正面にはイオニア式の円柱を4本並べ、両端の目地を目立たせた石積みで引き締めたアメリカン・ルネサンス様式。

B ニッケビル
Nikkei Bldg.



■昭和12年(1937)
■鉄筋コンクリート造6階建
■設計: 竹中工務店
この字型のアメリカンスタイルの建物。1階は御影石、2階以上は乳白色のタイルが貼られていたが、タイルの剥離防止に2階以上はアルミ板で覆われている。

G 神港ビルディング
(旧川崎汽船本社)
Shinko-Bldg.



■昭和14年(1939)
■鉄骨鉄筋コンクリート造8階建
■設計: 木下建築事務所
外壁は花崗岩が貼られ、南東角のアールデコ調の塔屋が海岸通の景観のアクセントになっている。東側入口は往年を思わせる木製の回転扉がいまも活躍中。

H 神戸市立博物館
(旧横浜正金銀行神戸支店)
Kobe City Museum



■昭和10年(1935)
■鉄筋コンクリート造3階建
■設計: 桜井小太郎建築事務所
銀行として建てられたが、内部は昭和57年に博物館として改修。正面に6本のドリア式半円柱が並び、ほかの側面には壁柱を巡らせた古典主義様式の建築。外壁は御影石貼。

I チャータードビル
(旧チャータード銀行神戸支店)
The Former Chartered Bank Kobe Branch Bldg.



■昭和13年(1938)
■鉄筋コンクリート造4階建
■設計: J.H.モーガン
正面中央に3本のイオニア式円柱を並べ、3・4階はアチック(屋根階)として下階よりも簡潔な意匠に。デザインの違う東西の庇で躍動感を出している。

K 旧三菱銀行 柱頭 史跡
The remains of the top part of the stone-column of the Former Mitsubishi Bank Bldg.



1929年に建てられた三菱銀行三宮支店(現神戸支店)の柱頭部分が播磨町に残されています。建物の正面玄関にあった獅子のブロンズ像は、神戸ダイヤモンドビルのエントランスホールに移設され、当時の風格をいまに伝えています。

L 居留地内の門柱 史跡
The gate post of Lot No.68.



68番館の門柱はその後の明治15年頃に68番に住んだエッチ・ショニングの住居前にあったものと考えられています。ほかにも旧居留地内には同じ形の門柱が残されており、開港当時の面影をしのばせます。

M 居留地の下水道 史跡
The first modern sewage system in Japan.



神戸付近で焼かれたレンガを使った居留地の下水道は、円形管と卵形管が南北道路に沿って6本1880mが敷設されました。近代下水道としては日本で一番古いもので、現在でもその一部が下水道の雨水幹線として使われています。

N 108番 近藤商店 史跡
The remains of Kondo & Co. Ltd. Bldg.



古い建物のレンガ造りの窓周りが伊藤町に残されています。窓枠には重量を支えるために御影石を三角に組んで載せ、レンガは現在のものよりも薄いものが用いられています。下の社名板は昭和8年頃のものです。

O 124番の碑 史跡
The remains of the brick wall at Lot No.124



124番が現在の東町、背中合わせの119番が伊藤町です。この2つの土地は税闘に近いことから赤レンガの倉庫として使用されていました。第一次世界大戦で外国人商人が引き上げたのち兼松商店が修復した本店の通用門跡が残されています。

旧居留地の歴史

History

1. 開国と居留地のはじまり

日本の歴史が大きく動いた幕末。安政5年(1858)に幕府が諸外国と結んだ日米修好通商条約により、日本は長年に及んだ江戸幕府の鎖国政策に終止符を打ち、横浜・長崎・函館・新潟・兵庫(神戸)の5港を開港することになりました。神戸旧居留地の歴史は、この時、はじまったといえます。

文久元年(1861)、初代駐日英國公使のオールコックは、長崎からの帰途、視察のために兵庫津に上陸。この一帯が外国人居留地として好適であると日本側役人に伝えています。しかし時の政情不穏から、兵庫津は横浜に遅れること10年、慶応3年12月7日(1868年1月1日)に開港となります。混乱した時代背景の中、日本人と外国人との紛争を避けるために、外国人居留地は当時の兵庫の市街地から3.5kmも東の砂地と畠地であった神戸村に造成されることとなります。



神戸市立博物館蔵

2. 居留地の建設



神戸市立博物館蔵

神戸港の開港と共に、外国人のための住居や通商の場として造成された居留地。しかし開港当初は間に合わず、整地が終わって第1回目の競売が行われたのは慶応4年(1868)7月24日(西暦9月10日)でした。

居留地の造成は当初から、ヨーロッパの近代都市計画技術を基に、イギリス人土木技師J・W・ハートが設計を行い、格子状街路、街路樹、公園、街灯、下水道などが整備され、126区画の整然とした敷地割りが行われました。この形状は現在もほとんど変わっていません。

整備の後、競売で土地を購入した外国人たちはすぐに商館の建設を始めました。最初に竣工したのは10番のグッショウ商会の倉庫です。その後、競売は明治2年、3年、6年に計4回実施され、126区画の地所はすべて売却、数年をかけてその全容を整えていきます。

当時の英字新聞“The Far East”には、「東洋における居留地として最も良く設計された美しい街である」と高く評価されました。

3. 居留地の運営

当時定められた神戸外国人居留地の範囲は、東は旧生田川、西は鯉川筋、北は旧西国街道、南は海岸線に囲まれた約500m四方の狭い地域でした。この居留地の運営や行政には、各國領事、兵庫県知事、登録外国人の中から互選された「居留地会議」の常任委員会があたりました。同会議は、独自に道路、下水、街灯などを整備し、運営・管理まで行い、運営の財源は土地の借地権の競売から得られた収入と、土地に対して1年ごとに徴収した地租によるものでした。その他、居留地会議では警察税を徴収して警察隊を組織し、居留地内の犯罪を取り締まり、捕らえられた犯罪者は各國の領事に引き渡され、各國の領事により裁かれていきました。

当時の神戸外国人居留地の特徴の一つとして、この自治組織の優秀さには目を見張るものがあります。もともとこの地に居留民が少なかったという環境と、利害の対立する諸外国人の意志が反映されやすい機構であったこと、またヘルマン・トロチックなど後世に名を残す優秀なスタッフを擁したこともあり、居留地返還までの長きに渡って自治行政権を行使させることができたのです。



神戸市立博物館蔵

4. 居留地の返還と繁栄



神戸市文書館蔵

明治27年(1894)日英通商航海条約が締結、明治32年(1899)7月17日午前10時、居留地返還式が執り行われ、現金を含む居留地会議財産とともに居留地は日本政府に返還されました。東遊園地や墓地、消防用具、ガス燈などが神戸市に引き継がれ、通りには海岸通、播磨町などの地名が新たにつけられました。当時の式典の中で、フランス領事ド・ルシイ・フォサリュウは「居留地の歴史はそのまま神戸の歴史を述べることになるでしょうし、神戸の歴史を抜きにして居留地の歴史も語れません」と挨拶したのです。

返還以後、大正時代から昭和初期にかけて、ビジネスの中心地として発展を続けます。

特に大正3年(1914)に始まった第一次世界大戦では、世界的な船舶不足を背景に造船ラッシュとなり、港神戸は好景気にわき上がりました。

さらに大正12年(1923)の関東大震災で横浜港が壊滅的な打撃を受けると、生糸を始めとする横浜の輸出入产品が神戸へ運ばれ、ますますの発展を遂げます。しかし居留地そのものは戦争の打撃によって外國商館が衰退し、新たに近代洋風建築の中層オフィスビルが次々と建てられていったのです。

神戸
旧居留地
散策ガイド

Kobe Former Foreign Settlement
Walking Guide



旧居留地はいからプロジェクト
実行委員会

5. 第二次世界大戦と戦後

その後の第二次世界大戦勃発時には、神戸在留の外国人たちの活動は大きく後退し、その多くは祖国へ追われていきます。さらに昭和20年(1945)の6月5日の神戸大空襲により、旧居留地も126区画のうち約70%の区画の建物が破壊されてしまいました。

戦後、戦災復興事業が中心となって復旧は開始されますが、当時の社会情勢の中、旧居留地の復興は遅々として進まず、昭和25年(1950)の朝鮮戦争による特需ブームによって経済活動が活発化するとようやく、旧居留地内にも新しいビルが建つようになります。昭和30年代後半になると、日本は高度経済成長時代へと突入しますが、東京への本社機能の流出傾向が強まり、旧居留地の地位も相対的に下がって、ビルにも空室が目立つようになります。



しかし昭和50年代頃から、旧居留地内の近代洋風建築物と歴史的景観が見直され、これらを活用してブティックや飲食店、オフィスも再び増加はじめました。昭和58年(1983)、旧居留地は神戸市都市景観条例に基づく「都市景観形成地域」に指定され、この頃から旧居留地は以前とは異なる趣の活気が見られるようになっていったのです。

6. 阪神・淡路大震災と復興



平成7年(1995)1月17日未明、阪神・淡路大震災が突如発生します。旧居留地内にあった106棟のビルは大小さまざまな被害を受け、うち22棟は解体を余儀なくされました。この中には、居留地時代の唯一の建物である旧居留地15番館(明治13年頃築、国指定重要文化財/免震構造とした上で復元)をはじめ、海岸ビル(大正7年築/外壁復元)、大興ビル(大正8年築/解体)、明海ビル(大正10年築/解体)の4棟の近代洋風建築物も含まれていました。

しかしその後の再建活動は、他の周辺被災地に比べると概ね順調に進み、震災前と比較すると飲食店やブティックなどの店舗はますます増え、道路では歩道の拡幅やベンチの設置など歩行者主体の整備が進められるなど、一層にぎわいを見せています。復興にあたり近代洋風建築によって形作られていたかつての街並みの良さを継承することが提案され、その後、安全・安心のまちづくりやユニークなまちづくりにも目を向け、以前にもまして安全で魅力的な街並みづくりに取り組まれています。

